## 男女共同参画 in 韓国

トライアングル編集員
田中芳さん
（鹿児島純心女子大学）
が鹿児島大学留学生の
全在胤（ジョン・
ジェユン）さんに
インタビューしました。

**1** 一般的に、女性は結婚後も仕事を続けますが、出産を機に仕事を辞める場合が多いそうで、共働きの認識はあまり強くないようです。しかしながら最近では子どもを保育園に預けたり、親（子どものおばあちゃん）に子育ての協力をしてもらったりするなどして、出産後も仕事を続ける女性が増えてきているそうです。

**2** 以前に比べて、最近は男性が家事に協力しなければならない、という認識が高い家庭も増えてきているようです。専業主婦の場合でも、父親が、休日や時間がある時に家事をすることもあると聞きました。また、最近は料理教室に通って、きちんと料理を学ぶ男性が増え、その割合は年々高くなっているそうです。私が韓国に短期留学をした時に下宿をしていた家では、その家庭のお父さんが食事を作ることもあり、お皿を洗う担当はいつもお父さんでした。

**3** 昔は、「娘より息子を産む」という風潮がありましたが、最近はそのような考え方はそれほど強くないようです。「昔はこうだったけど、今はそうではない」という話が多くあり、女性と男性の働き方の違いや、家事や育児の考え方なども時代とともに変化しているという印象を受けました。また、今回のインタビューの時も、私の短期留学経験からも、女性に対しての配慮を感じることが多かったように思います。

## 男女共同参画 in オーストラリア

留学中のトライアングル編集員
清水晴奈さん（鹿児島純心女子大学休学中）
からのレポートです。

**1** 日本に比べ、働く女性の数が多いような気がします。

驚いたのは、私の通う語学学校の中に幼稚園があることです。大学で働いている人だけではなく、学生の子どもも預けることができるそうです。

**2** **3** オーストラリアの父親の方が、日本より、育児に関わっている感じがします。

街中でも、ベビーカーを押している父親らしい人をよく見かけますし、公園では、子どもと父親だけが遊んでいる光景が珍しくありません。

また、日本との違いは、休日の過ごし方にもあるようです。

休日には店も早く閉まるし、仕事も休みになるので、家族みんなでゆっくり過ごす時間が日本よりも多いようです。そのせいかわかりませんが、日本にくらべ、家族同士の距離が近くて、一緒にいて、ほんわか温かい感じの家族が多いです。

専業主婦をしていたときは特に、全く抵抗なく。

しかし、「主人」という言葉は、もともとが主（あるじ）たる人であり、夫と妻の対等な関係を表していない。「家内」も同様―というようなことを聞いた。それで、そうだ、これからは「主人」と言わず、「夫」と言おうと決めたのはほんの一年ばかり前。

鹿児島の私の友人たちが夫のことをどのように言うかというと、「パパ」「おとうさん」「だんな」「○○さん／ちゃん（名前）」そして、少数派が主人、夫、連れ合い。このパパ云々は、ヨーロッパでは有り得ない。答えは明確。自分の父親ではないから、と。

父親という家庭の機能を分離し、一人の女性である私の対等なパートナーとしての伴侶、を夫として人に語ることができるためには、常に、個人としての自分を意識したい。

「夫」「妻」といった、中立的な言い方はまだ広まっていないところをみると、夫婦の平等関係の自覚はまだまだなのではないか。「パパ」をやめ、「主人」をやめて、（「ママ」「うちの」「あれ」もやめて欲しい。）「夫」と自然に言えるようになったとき、「夫」に対する「妻」としての自覚も高まるような気がする。でも、第一声は、何か、どこか、恥ずかしいような…。いや、相手がいない場所で使えば良い。

言葉は習慣。習慣は人を作る。思い切って、「夫」「妻」と言い始めてみたらどうだろう。